

台湾集集断層掘削における孔井内検層

Geophysical logging at boreholes of the Chelongpu fault

伊藤 久男[1], 氏家 恒太郎[2], 田中 秀実[3], 安藤 雅孝[4]

Hisao Ito[1], Kohtaro Ujiie[2], Hidemi Tanaka[3], Masataka Ando[4]

[1] 地質調査所, [2] 科博・地学, [3] 愛媛大・理・生物地球圏科学, [4] 名大・理

[1] Geological Survey of Japan, [2] Department of Geology, National Science Museum, [3] Dept. of Geo/Biospheric Sci., Ehime Univ, [4] RCSV, Science, Nagoya Univ.

集集地震断層を貫く2本の孔井において空隙率、密度等の検層が行われた。孔井は集集地震断層の北部（豊原サイト）と南部（南投サイト）の2ヶ所で、北部では傾斜 50° 、南部では垂直井である。

南部（南投サイト）では破碎帯が幅広く、北部サイトでは局在化した破碎帯がコア観察から確認されている。これに対応して南投サイトで空隙率、密度とも断層破碎帯に伴う顕著な変化はない。北部サイトでは、コア観察による顕著な破碎帯に対応した明瞭な空隙率、密度の変化が見られる。

なお測定は台湾 NCU、Wang 教授らの協力により行われた。

集集地震断層を貫く2本の孔井において空隙率、密度等の検層が行われた。孔井は集集地震断層の北部（豊原サイト）と南部（南投サイト）の2ヶ所で、北部では傾斜 50° 、南部では垂直井である。

南部（南投サイト）では破碎帯が幅広く、北部サイトでは局在化した破碎帯がコア観察から確認されている。これに対応して南投サイトで空隙率、密度とも断層破碎帯に伴う顕著な変化はない。北部サイトでは、コア観察による顕著な破碎帯に対応した明瞭な空隙率、密度の変化が見られる。

なお測定は台湾 NCU、Wang 教授らの協力により行われた。